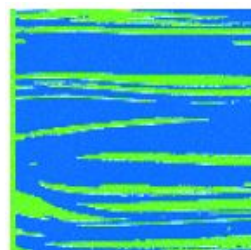


日本行動分析学会ニュースレター

J-ABA ニュース



2026年夏号 No. 119 (2026年08月17日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 山岸 直基
〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5 アカデミーセンター (株)国際文献社内
一般社団法人日本行動分析学会事務局
URL : <http://www.j-aba.jp/> E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

目次

<総務委員会報告> 事務委託先変更奮闘記 下山 真衣 (信州大学)・村井 佳比子 (神戸学院大学)	2
<編集委員会報告> 吉岡 昌子 (愛知大学)・井垣 竹晴 (流通経済大学)・野呂 文行 (筑波大学) . 3	
<若手委員会報告> 東京 秋の陣、京都 春の陣 ―今年度の若手会イベントについて― 日本行動分析学会 若手会委員長 福田 実奈 (京都外国語大学)	5
<ABAI・SQAB 参加記> 国際行動分析学会で見つけた私の「強化子」と「マンド」 伊藤 真子 (明星大学)	6
<研究会等の開催記・参加記> 「眞邊先生最終講義」から「強度行動障害のある方の支援者に対する研修 の実践報告会」にワープする～行動分析学が社会に貢献し続ける～ 三田地 真実 (教育ファシリテーション 研究所)	8
<研究会等の開催記・参加記> 第11回医療行動分析学研究会を終えて 実行委員長 高野 佳子 (医療法人 清水会)	11
<研究会等の開催記・参加記> 第41回日本行動科学学会ウインターカンファレンス開催記 大会長 権藤 眞織 (神戸親和大学)・事務局長 中村 徳子 (昭和女子大学)	13
<こんな本が出ます> 『心理学は行動から何を語るか』 福田 実奈 (京都外国語大学)	17
編集後記	19

＜総務委員会報告＞

事務委託先変更奮闘記

下山 真衣（信州大学）・村井 佳比子（神戸学院大学）

日本行動分析学会は会員数が 1,000 人を超え、かねてより事務の効率化が課題となっていました。理事会では 2023 年から事務委託内容の見直しを始め、最終的に本学会機関誌の編集にもかかわっている株式会社国際文献社様に業務をお願いすることになりました。約 1 年の準備期間を経て、2025 年 11 月 30 日に国際文献社様と業務委託契約を締結、12 月 1 日から日本行動分析学会の事務局が大阪から東京都新宿区へ移転することとなりました。

十分な準備期間を設けたつもりでしたが、実際に変更手続きに入ると、予想外の事態の連続でした。登記は？税金は？保管資料は？？？まさかのトラブルに見舞われたり、思わぬ事態に直面したりすることもあり、連日のメールのやり取りに、一体どの作業がどこまで進んだかがわからなくなってしまうこともしばしばでした。これまで見ていなかった膨大な事務作業の全貌が明らかになるにつれ、前委託先であるリファレンス様に、いかに多くのことをお任せしていたかがわかりました。

しかしながら、「雨降って地固まる」とはよく言ったもので、国際文献社様や顧問弁護士のサポートを受けながら、理事会を挙げて変更作業に取り組んできたおかげで、よりよい体制が整えられつつあると思います。4 月からはマイページの運用も始まりました。まだまだ手探りの

部分はありますが、今回の事務委託先変更を通じて、学会運営を見直す貴重な機会にもなったと思います。

事務委託先変更に伴い、学会 HP 管理体制も変わり、HP 管理については総務委員会と大洋堂様とで一緒に進めていくことになりました。これまではリファレンス様にお願いしていた部分が多く、変更直後は HP 運営や事務作業の流れが十分にわからず、戸惑うこともありました。

HP のここを修正したら、実はあっちもこっちも修正が必要だったみたいな連鎖が起こったり。また、更新作業のたびに見積もりをお願いし、財務委員の先生方に承認いただいていたため、対応に時間がかかってしまう場面もありました（関係した先生方ごめんさい！）。そうした中で、これまでリファレンス様が細かな点に気づきながら HP を管理してくださっていたことのありがたさを、改めて感じました。

4 月からは HP 管理の体制を見直し、定型的な保守については月額でお任せできる契約に切り替えました。少しずつではありますが、より安定して情報発信できる体制が整ってきたように感じています。

これからも会員の皆様にとって見やすく、利用しやすい HP になるよう工夫していきたいと思っています。ぜひ、学会 HP を見にきてください。

＜編集委員会報告＞

吉岡 昌子（愛知大学）・井垣 竹晴（流通経済大学）・
野呂 文行（筑波大学）

この記事では、編集委員会より機関誌『行動分析学研究』に関する動向をお伝えいたします。Figure 1は、本誌に投稿された論文数、および、通常の投稿と編集委員会からの依頼を主とする特集や解説等の論文掲載数を 2015 年度から 2025 年度まで年度単位でみたものです。投稿数の年度平均は 20.0 本 ($SD = 3.77$) となり、最小値は 2019 年度の 13 本、最大値は 2020 年度の 27 本でした。この 11 年間、継続的に投稿いただいております。編集委員会一同、会員の皆さまが機関誌の発展を支えてくださることにお礼申し上げます。

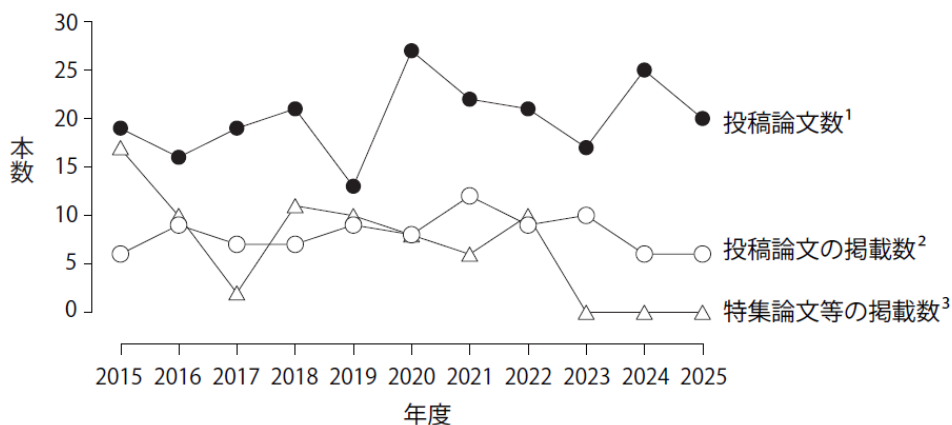
Figure 1 では 2023 年度以降、編集委員会からの依頼を主とする特集論文等の掲載数は 0 本

になっています。これは、今期の編集委員会ではオンライン投稿・審査システムの導入をはじめとする編集業務の基盤整備を優先課題としたためです。年 20 本前後の投稿に対し、従来はメールを中心に投稿・査読の手続きを進めてきましたが、進捗管理が煩雑になってきたことから、それらを一元管理するオンライン投稿・審査システムを導入し、2026 年 4 月 1 日より運用を開始しました。システムの URL は学会ウェブサイトの「投稿論文の手続き」のページに掲載しています。

投稿論文の手続き：

<https://j-aba.jp/journal/post.html>

Figure 1 『行動分析学研究』の投稿論文数、および、投稿論文と特集論文等の掲載数



注)

¹投稿論文数：各年度に投稿され、編集事務局で受け付けた論文の数を示す。

²投稿論文の掲載数：特集以外の「論文」、「研究報告」、「実践報告」、「テクニカルノート」、「展望」の 5 種別について 1 号、2 号の掲載数を合計した値を示す。

³特集論文等の掲載数：特集の上記 5 種別と他の種別（「解説」、「書評」など。「追悼」と「ガイドライン」は除く）の 1 号、2 号の掲載数を合計した値を示す。

4月以降、早速、新システムを通じた投稿をいただいています。編集委員会も著者の方と同様に、新たなシステムに慣れながら運用を進めているところです。導入からまだ日が浅いものの、メールやPCのフォルダを検索して「どこまで進めていたかな？」と思い出す行動連鎖に頼らずとも、システム上で進捗状況を通覧できることは、編集業務の助けとなっています。

投稿・審査システムの導入に加え、本誌に関わる最近の変更点として、40巻2号（2026年3月発行）よりJ-STAGEでの即時公開を開始しました。冊子刊行から同サイトでの公開までに設けていた1年間の期間を廃止し、今後は公開準備が完了次第、J-STAGE上でも最新号に掲載された論文にアクセスいただけます。

『行動分析学研究』J-STAGE：
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjba/-char/ja/>

また、本誌の掲載内容についても見直しをいたしました。これまで各巻1号には、定款や細則など学会の各種規程を掲載し、2号には投稿規程と変更があった規程を掲載しておりました。しかし、近年は学会ウェブサイト最新の規程を常時掲載し、会員の皆さまにご確認いただける環境が整ったことから、41巻1号（2026年9月発行予定）以降は、規程については変更のあったもののみ掲載いたします。それぞれの最新の内容は、学会ウェブサイトをご確認ください。編集委員会では、本誌を通じて皆さまの研究成果や実践の知見が広く共有されることを願っております。ご投稿をお待ちしております。

＜若手委員会報告＞

東京 秋の陣、京都 春の陣 ―今年度の若手会イベントについて―

日本行動分析学会若手会委員長 福田 実奈（京都外国語大学）

若手会について

日本行動分析学会若手会は2017年1月に発足しました。若手会の発足の経緯については、ニューズレター No.88（<https://j-aba.jp/journal/n188h.pdf>）をご覧ください。若手会の活動理念は、日本における行動分析学の若手育成に資する活動を提案・実施し、それらの活動を通して研究室や専門分野の枠を超えた人的ネットワークの構築を推進することです。

今年度の活動について 1：若手研究者口頭発表セッション

昨年はオンラインで口頭発表セッションを開催いたしましたが、今年是对面で開催されます！このニューズレターが皆様のお手元に届く頃には、すでに発表の申し込み自体は締め切られておりますが、今年も非常に興味深く、熱意あふれるセッションになる予感がしております。本セッションは、年次大会1日目の自主企画シンポジウムの枠にて開催されます。若手研究者たちの熱気を感じに、皆様お誘い合わせのうえ奮ってご参加ください。

今年度の活動について 2：春の学校

コロナ禍以降、二年に一度のペースで開催してきた春の学校を、今年度も対面で実施します。年次大会が関東ならば春の学校は関西だ！とい

うことで、3月6日（土）・7日（日）に同志社大学（今出川キャンパス）で行う予定です。肝心の授業の内容は、現在若手会内で絶賛議論中ですので、続報をお待ちください。呼びたい先生を全員呼んだら四泊五日になってしまいます、困ったものです。なお、本イベントへの参加は若手会員優先ではありますが、定員に余裕がもしあれば、自称若手の方から、自他共に認める中堅の方、そして誰もが認める大御所の先生方まで、どなたでもご参加いただけます。年次大会の開催に合わせて参加受付を開始できるよう準備を進めておりますので、ぜひ今からスケジュールに入れておいていただけますと幸いです。

おわりに

若手会は、皆様からのアイデアを柔軟に取り入れながら、今後もより一層充実した活動を展開してまいります。「若手」という枠にとどまらず、学会全体を巻き込んで行動分析学を盛り上げていけるよう、委員一同、全力で駆け抜ける所存です。まずは、四泊五日になりかけた春の学校のプログラムを、無事に二日間に収めるミッションから始めます。

会員の皆様の温かいご理解とご支援、そして各イベントへのご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

<ABAI・SQAB 参加記>

国際行動分析学会で見つけた私の「強化子」と「マンド」

伊藤 真子（明星大学）

私の国際行動分析学会（ABAI）への挑戦は、2018年のサンディエゴ大会から始まりました。初めて足を踏み入れた国際学会で、日本の学会との「環境の違い」に大きな衝撃を受けたことを、今でも鮮明に覚えています。一言で表すなら、そこは「自由」に満ちた空間でした。シンポジウム会場の床に座り込んでコーヒー片手に発表を聞く参加者たち、ブレイクタイムに振る舞われるケーキや軽食、言語の壁を越えてボディランゲージで熱く交わされる議論、そこには「楽しみながら学ぶ」という文化が、一つの随伴性として見事に成立していました。サンディエゴでの学びが忘れられず、私はその後も毎年挑戦としてポスター発表を続けてきました。そして昨年度は幸運にも、学会の「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」の助成をいただく機会に恵まれ、ワシントンDCとポルトガルの2カ国で開催された学会へ参加することができました。この場を借りて、学会員の皆様に深く御礼申し上げます。

出迎えてくれたB. F. SKINNER先生の全身パネル



ワシントンDCのポスター発表では、新たな試みとして、独自に開発した「行動問題に対する支援のアイデア立案を楽しみながら考えるカードゲーム」の実演を、研究説明と交えて行いました。言葉が十分に伝わらなくとも、ゲームという共通のルールがあれば、海外の研究者たちとも深く議論を交わすことができました。実際にカードを動かし、ルールに則って笑顔が生まれるプロセスそのものが、私の研究の有効性を示す何よりのデータとなりました。「私の研究は、世界の人にとっても新しく、興味深いものなんだ」という確かな手応えを得られたことは、大きな自信へとつながっています。一方で、複雑なディスカッションを行うための十分な英語力はまだなく、今後さらに現地での時間を有意義なものにするためにはどうすべきか、という課題も見つかりました。また、今回は発表だけでなく聴講でも大きな刺激を受けました。参加者として聴講したシンポジウムでは、時に笑いが起こる中、動画や写真をふんだんに用いたプレゼンテーションが行われ、視覚的にも非常にわかりやすく最新の研究成果を学ぶことができました。これらポスター発表の経験と課題、そして国際学会で触れたシンポジウムの数々を糧に、近々、自分自身もシンポジウムの登壇に挑戦したいという新たな目標が生まれています。

さて、多くの国際学会を経験してきた私には、密かな「学会の楽しみ」があります。それが、会場に用意されているノベルティやグッズの数々です。受付で支給されるネームタグやネクストラップは、毎回異なるデザインであることが多く、今では大切なコレクションの一部となっています。さらに、会場のブース付近にはボールペンやエコバッグなども置かれています。毎年カラーやグリップの仕様がかわるボールペンは、私にとっての強化子であり、低確率で手に入るエコバッグは、穴があくまで使い倒すのがマイルールです。しかし、お目当てのノベルテ

ィは、ただ会場に行けば手に入るというものではありません。自発的にブースへ近づき、スタッフに声をかけなければならない仕組みになっています。そのため、私が最も流暢に、かつ高頻度で発話するマンドは、今や “Can I have this?” (これ、もらえますか?) です。

「言語が違うとどうなるんだろう」という不安や、お金がないからという理由で、こうした

貴重な経験を諦めてしまうのはもったいないと感じます。一步踏み出せば、そこには言葉の壁を越えた研究の共有と、新しい刺激、そして楽しいコレクションなど、様々な強化子が待っています。私のこの体験記が、これから国際学会へ一步を踏み出そうとしている方々の後押しになれば幸いです。

今までのグッズやノベルティの数々



毎年違うデザインのボールペン



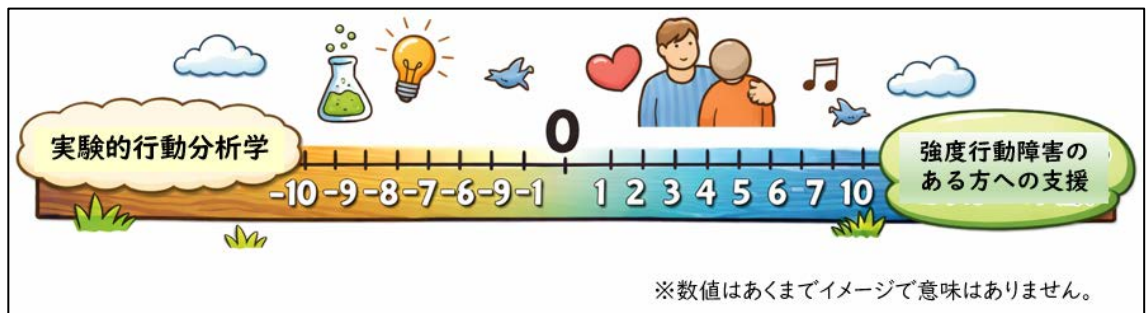
＜研究会等の開催記・参加記＞

「眞邊先生最終講義」から「強度行動障害のある方の支援者に対する研修の実践報告会」にワープする～行動分析学が社会に貢献し続ける～

三田地 真実（教育ファシリテーション研究所）

それはまさに随伴性のなせる業であった。
2026年3月14日、たまたま午前中に眞邊一近先生の最終講義を東京ステーションホテルで拝聴した後、総武線快速電車で飛び乗って、同日午後開催された千葉県発達障害者支援センタ

ー主催の「強度行動障害のある方の支援者に対する研修の実践報告会」に参加した、いや正確にはすることになった。一見全く異なる趣旨の二つの会に参加した後の私の心の内を図示するとこんな感じになる。



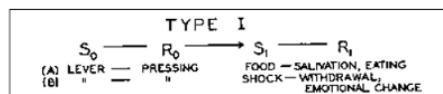
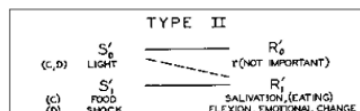
「行動分析学の学問としての真髄」(図の左端)と、それがどのように実社会で活用されて役立っているか」(図の右端)この両極端で活躍されているエキスパートの話を短時間にぎざっと聴く機会を得た、まさにそんな気持ちであった。丁度、私自身がその数日前に、とあるフォーラ

ムで、スキナーが最初にレスポナントとオペラントの区別（下図）のアイデアを発表した論文を紹介した直後であったので、それはまるで、1935年から2026年の今日までの90年余の行動分析学の発展と応用を走馬灯のように思い起こさせられる時間であった。

BF. Skinner (1935)

- Two Types of Conditioned Reflex and a Pseudo Type. *Journal of General Psychology*, 12, 66-77.

(後のレスポナント) ⇒



(後のオペラント) ↑

眞邊先生のご研究の業績は本学会で私が改めてご紹介する必要もないだろう。ただ、今回は先生がどうしてこの学問にご興味を持たれたのかといったプライベートなヒストリーを交えてのお話だったので、一つふたつここでもご紹介させていただきたい。1955年、鹿児島県屋久島のお生まれだったことは今回私も初めて知った。緑豊かな自然の中で育ちになったからだろうか、実は生物学の方に興味があったということで、高校時代は生物クラブに所属されていた。

その図書室で見つけた、メドニック著の『学習』（※早速、私自身大学図書館で予約した）が先生の人生を実験行動分析学へと大きく向かわせる第一の分岐点であった。そこで紹介されていたプラナリアの古典的条件づけの実験、及び条件づけられた個体から再生された個体もその条件づけの履歴が引き継がれるということに眞邊少年は「ビビビ!!」と来たかの如く、進路の方向を生物学から心理学へと舵を切る。しかし大学では心理学は文系グループということで、条件づけはおろか学習の専門家とも会えないままに、条件づけならこれだよと紹介された二冊の英語書籍を頼りにほとんど独学で勉強が続けられた。眞邊少年が学部1年生のときのことである。その二冊が、Kimble (1961) Conditioning and learning と Staddon (1977) Handbook of operant behavior であった。そこから先生の本格的なオペラント条件づけの学びと実際の実験が始まったわけである。

スキナー箱では基本的にコンタクト反応を従属変数にした実験が蓄積されていったわけであるが、眞邊先生はコンタクト反応以外の例えば移動反応や発声反応を装置の工夫開発で検出できないかと工夫を重ね、セキセイインコの二種の鳴き声を使い分ける研究など様々な研究へと発展させられた。

装置の開発が研究を後押しするというのは、スキナー自身『科学的方法における一事例史』（1956）においても述べており、「そうか、装置の開発はまだまだ続くのだ、ということは、ま

だまだ行動分析学の、特に基礎研究は発展する無限の可能性があるのだ」ということを特にここ数年のAIの台頭ぶりを身体で感じる時代においては強く感じられる、希望的展望を与えてくださるご講義であった。

眞邊先生のご発表の中でもスキナーのWalden Twoのご紹介もあり、スキナー自身が行動の科学を社会の平和のために活用する意義ということもご紹介されていた。

==

そして私は、午後の部「強度行動障害のある方の支援者に対する研修の実践報告会」にワーブする。「強度行動障害」とは、その名称が示す通り、行動障害の中でも「自傷、他傷、こだわり、もの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など本人や周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動が著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている状態を意味する用語」と厚生労働省では定義されている。2021年時点では全国でのべ68,906人と全人口に占めるパーセンテージは高いものではないが、「特別に配慮された支援」が必要という意味においては、関わる周囲の人は相当な負担を強いられる場合が多い。

千葉県発達障害者支援センターでは、副センター長の田熊立先生をリーダーとして、2014年から今年度まで12年間に亘って、毎年16人の施設支援者を対象として、30日間を費やして「実際に強度行動障害のある人の支援ができる人」を養成するための研修プログラムを実施している。その受講者がそれぞれの現場で一人の利用者さんに対する具体的な支援の実践を広く公開して発表するというのが本会の趣旨である。私自身はこの30日研修のうち4日間のファシリテーション研修の担当講師として、2016年度から関わらせてもらっており、可能なときには実践報告会に参加して受講生の最終成果物を拝見させてもらっているのだ。

世の中にはたくさんの研修プログラムが存在するが、この千葉県のプログラムは「実際に機

能的アセスメントを行って、行動データを取り、指導仮説を立てて実践、データから効果を判定する」という基本的な問題行動へのアプローチを体得することを目的としてデザインされている。この目的を達成するためには「2～3時間の座学研修では無理」と、年間 30 日、かつ 0JT（センタースタッフが受講者の職場施設に出向いて一緒に観察、記録などへのフィードバックを行う）が必須ということで、年間に受け入れられる人数は県全体でわずか「16 人」と限定している訳である。

積み上げというのは素晴らしいもので、そうやって毎年 16 人の実力を蓄えた現場スタッフを養成してきた結果、これまでの受講者の総数は 184 名になった。2019 年からはこれらの受講者が今度は別の施設のスーパーバイザー的役割を行う「行動障害者支援サポーター派遣事業」も始まっている。学んだ者がさらに現場に学んだことを広げる取り組みである。

千葉県教育会館の大ホールにはおおよそ 500 人の福祉関係者が集い、朝から夕方までの会に本当に熱心に参加されて学びを深められようとしていた。

==

実は冒頭で示した数直線？は、このホールの椅子に座って発表を伺っていた、その終盤で心にふと浮かんできたものであった。

「こうやって強度行動障害のある人に科学的な対応ができるのは、実験的行動分析学の研究知見があつてこそじゃないか、もしこの知見を私たち人類がまだ手に入れていなかったら、重度の行動問題を起こす人に対して私たちはどうや

ってアプローチしていたのだろう」

そのことに気づいたとき、全く別（自分自身、午前と午後の会は別という認識であった）と思っていた、眞邊先生の最終講義と午後の実践報告会が一つの線でパーッとつながったのである。ある意味、行動分析学というキーワードで示される世界の最も厳格に要因統制を行って繰り広げられている基礎の領域と、応用の世界でもおそらく最も対応が難しいと考えられている強度行動障害のある人への対応という領域は、100 年近い時を経て、しっかりと確実につながったのである。

世界の平和のために行動分析学を活用せよ、と繰り返し述べられていたスキナー先生も、行動分析学がアメリカから遥か太平洋を越えた日本においてもその実践が着実に広がり、当事者そしてその家族、支援する側の強力なよりどころとなっていることをさぞや喜んで見てくださっているに違いない。

しかし、まだまだ行動分析学を学んだ者がなすべきことは山積している。最初に示した数直線のそれぞれの立ち位置でそれぞれの役目をしっかりと果たすことを自分の使命としていきたい、改めてそう思いながら帰路に付いた日であった。眞邊先生、田熊先生を始めとするセンターの皆様本当に心からの敬意を表します。

※本原稿については、眞邊先生、田熊先生に内容をご確認いただいた上で投稿させていただいております。

＜研究会等の開催記・参加記＞

第 11 回医療行動分析学研究会を終えて

実行委員長 高野 佳子（医療法人清水会）

1. はじめに

2026 年 5 月 16 日（土）、大阪医科薬科大学本部北キャンパス（看護学部）講堂にて、第 11 回医療行動分析学研究会を開催いたしました。本研究会は、医療の多様な現場において人の行動に焦点を当て、実践と研究をつなぐ場として 2015 年に設立されました。今回は、節目となる 10 年目を経て新体制の代表世話人のもとで初めて開催した研究会であり、47 名の参加者が集まりました。対面形式ならではの活気ある議論が交わされ、学際的かつ実践的な知の交流の場となりました。

2. 教育講演

立命館大学の谷晋二先生より、「臨床の中での会話のやり取り（関係フレーム理論から）」と題した講演が行われました。本講演では、文脈的行動科学（CBS）および関係フレーム理論（RFT）に基づき、言葉の内容そのものではなく、その言葉がクライアントの行動に対してどのような「機能」を果たしているかを問う重要性が示されました。人間特有の能力である恣意的関係反応（AARR）が心理的苦悩の源となる一方で、アクセプタンスや脱フュージョンといった手法を用いることで、言葉の制御力を弱め、価値に沿った行動を活性化できることが説明されました。また、最新の知見である関係密度理論（RDT）にも触れられ、強固なルールのネットワークに対して、新たな関係（価値に向かう行動）を少しずつ編み込んでいく戦略が提示されました。

3. 話題提供：行動分析学による臨床実践の展開

午後のセッションでは、3 名の演者から具体的な介入事例が報告されました。

話題提供①：ABA と作業療法の協働 神経発達症の女兒に対し、作業療法士が ABA の原理を用いて介入した事例でした。感覚回避からブランコを拒否していた A さんに対し、「卵を探す冒険」や「プリンセスごっこ」といった本人の選択を尊重した遊びの中にブランコを取り入れました。その結果、ブランコ乗車時間は平均 13.8 分（最大 30 分）へと大幅に増加し、姿勢制御の多様化や、学校での積極性の向上といった般化も認められました。

話題提供②：行動的モメンタムを用いた動作練習 Pusher 現象を呈する重症左片麻痺患者に対し、行動的モメンタム（変化に対する抵抗）の観点から座位保持練習を検討した事例でした。当初の物理的な環境設定だけでは学習が停滞しましたが、適正姿勢の維持を促す「触覚フィードバック」をプロンプトとして導入したことで能動的な姿勢制御が引き出されました。これにより「行動的質量」が高まり、介助なしでの座位保持獲得（SCP スコアが 2.75 から 1.5 へ改善）に至りました。

話題提供③：高齢者への咽頭残留除去ケアプログラム 特別養護老人ホームにおいて、介護職がアルゴリズムに基づき実施する「交互嚥下」支援の効果を検証した事例でした。15 名の対象者のうち 13 名で交互嚥下回数が増加し、頸部エコー評価において喉頭蓋谷および梨状窩の咽頭残留が有意に減少しました。介護職への肯定的フィードバックが支援行動の維持に寄与しており、多職種連携による誤嚥リスク低減の可能性が示唆されました。

4. おわりに

今回の研究会を通じ、医療現場の困難な課題

に対して、行動を「機能」として捉え直す視点が
いかに強力なツールになるかを再認識しました。
谷先生が講演の結びで述べられたように、患者
の言葉や行動を「行動を縛り、あるいは支える

機能的な網の目」として捉え、その文脈に寄り
添い続けることの大切さを学びました。

最後に、運営に尽力いただいた事務局および
実行委員の皆様に心より感謝申し上げます。

＜研究会等の開催記・参加記＞

第 41 回日本行動科学学会ウインターカンファレンス開催記

大会長 権藤 眞織（神戸親和大学）・事務局長 中村 徳子（昭和女子大学）

2025 年 2 月 9 日から 11 日にかけて、長野県軽井沢において、日本行動科学学会第 41 回ウインターカンファレンスを開催しました (<https://www.jabs.jp/?p=942>)。テーマは「行動分析学領域におけるさまざまな社会実装を探る」です。

他学会の催しではありますが、本 NL でご紹介したいと思います。その理由は、二泊三日の全プログラムを通して「行動分析学」をテーマとしたシンポジウムで構成されていたからです。昨年のウインターカンファレンスの企画の一部をお手伝いさせていただいたご縁で、今回の大会を立案・運営する好機に恵まれました。身に余る機会ではありましたが、近年の行動分析学の目覚ましい発展に関する認知や理解が、心理学研究者に十分伝わっているのだろうかと感じることがあり、また、本学会の熊野大会では、参加者全員が同じ宿泊施設に泊まり、夜通しディスカッション（飲み会？）を行った経験が懐かしく思い出され、日本行動科学学会にも所属されておられた杉山尚子先生に相談いたしました。

日本行動科学学会とは、前身を「異常行動研究会：Personality and Behavior Disorder（頭文字を取って PBD と呼んでいました）」といい、1959 年の夏、北海道で産声をあげました（今田, 2026）。当時、基礎的分野の実験研究が主流の時代に、20 代後半から 30 代前半の若い研究者が、基礎研究者と臨床の研究者が研究分野の垣根を越えて忌憚なく意見交換を行う場として研究会を発足しました。当時としては将来の心理学の在り方を先取りした先駆的な取り組みだったと思います。長らく研究会として年次大会を実施してきましたが、1993 年から学会となりました。今回開催しましたウインターカンファ

レンスは、PBD の創始者の一人である今田寛先生がアメリカで体験した研究会のスタイルを踏襲して 1985 年から開催され、現在に至ります（柳井ら, 2026）。合宿型の研究会は当時からも開催されていたと思いますが、ウインターカンファレンスでは、日中はスキーなどのウィンタースポーツや温泉を楽しみ、夕食後から研究会をスタートさせるというプログラムになっています。会員のみならず、非会員でもどなたでも参加でき、時には友達や子ども連れて参加もできるので、インフォーマルな場で研究者同士の交流もさまざまに深まりました。研究会は、夕食後ですので、好きな方はお酒も召し上がりながら、自由闊達に意見交換がなされ、朝まで飲み明かすということもよくあり、昭和の雰囲気の色濃いカンファレンスです。

今年の第 41 回カンファレンスでは、会員・非会員を含め 75 名の皆様にご参加いただきました。カンファレンス企画講演と 3 件のシンポジウム、13 件の一般発表、更に希望者を対象にサムエル幼稚園とさやか星小学校の見学会を行いました。企画講演では、杉山尚子先生に「行動分析学とは何か？」について、一般の方や若い研究者や実践者にもわかりやすく紹介いただきました。ご自身の研究者としての歩みも交えながら、歴史的な経緯を含め、行動観についても幅広くお話をいただきました。3つのシンポジウムでは、「社会実装」をメインテーマに、シンポジウム①教育領域においては、奥田健次先生が設立された幼稚園・小学校での実践例について、島岡次郎先生と吉野智富美先生にご紹介いただきました。奥田先生の「笑い」をめぐる行動修正を行うグループワークを体験したり、島岡・吉野両先生方には、支援者としての成長について

も語っていただき、行動分析学を実社会に応用する際の支援者の在り方についても考察が深まりました。

シンポジウム②では、医療現場での臨床例から、3名の先生方(奥田健次先生、栗原康通先生、原井宏明先生)に、行動分析学からのこれまでの取り組みと、今後の展望について、活用の意義や応用可能性を踏まえた熱いプレゼンテーションとディスカッションが行われました。強迫神経症に対する治療として、原井先生が実践しておられる手法をご披露くださいましたが、あまりの衝撃に会場に居た全員が何が起こったかすぐに理解できず、一瞬、目が点になりました(私だけだったのでしょ。履いておられたスリッパを脱ぎ、裏面を実際に「ぺろり!」と舐められたのです!!!)。

シンポジウムの③では、3つの領域から3名の先生方にそれぞれの社会実装についてご紹介いただきました。まず、伴和幸先生から、動物園学への応用事例として動物福祉の観点に立った飼育管理システムについてお話いただきました。次に、ビジネス領域から組織行動マネジメント(Organizational Behavior Management: OBM)の取り組み事例を八重樫勇介先生にお話いただき、実社会での実装の難しさや行動分析学の「行動観」についての理解の大切さを再認識する機会となりました。最後に、今注目のPBS(ポジティブ行動支援)の実際と、アカデミックな領域から市井のあらゆる人たちの行動サポートにむけたこれからの社会実装について、大対香奈子先生からご紹介いただきました。先生の『PBSを「専門家のための技法」から「誰もが自分の人生をより良くするために使える知恵」へと変貌させていく』というコメントに感銘を受けました。行動分析学は、人々の生活に深くかわり、よりよい人生を歩むための知恵として活用されるべき学問であり、私たちのライフスタイルにも寄与し得るものであることを、改めて認識しました。

行動科学学会のウィンターカンファレンスには、基礎と臨床の橋渡しを志し、形式にとらわれず、各自の専門領域や立場を越えて、共に遊び、共に学ぼうとする風土があります。今、カンファレンスを振り返ってみると、登壇者の先生方が研究者・支援者としての歩みを率直に語ってくださったことが印象に残っています。人間観や支援者観にまで及ぶお話は、通常の学会ではなかなか伺うことができない貴重な学びとなりました。様々な異なる専門領域でありながら、「行動のよりよい変容」が確固たるコンセンサスとなり、先生方と参加者の学びを共有することができたよい時間となったと感じました。運営上至らない点もありましたが、そんなこともものともせず、学びの時間を有意義にお過ごしくださったみなさまに感謝申し上げます。

このウィンターカンファレンスのスタイル、おすすめです!行動分析学会の会員のみなさまにもきっと合うと思うので、夏の年次大会に加えて、是非、「ウィンターカンファレンス」を開催していただきたいと思います。

以下に、3名の先生方から体験記をいただきました(五十音順、敬称略)。

近藤 鮎子(株式会社エルチェ)

今回、ウィンターカンファレンスに初めて参加させていただきました。奥田先生のワークショップでは、悪口を言われたときに賢く言い返す行動を増やすという身近な題材を通して、その場で自分たちの行動変化を体験でき、大変面白く刺激的でした。吉野先生の実践紹介では、ご自身の変化と子どもたちの変化をビデオを通して具体的にお話しいただき、支援者の行動が変わることと子どもたちの変化との相互作用について考える機会となりました。栗原先生の5歳児健診や地域連携のお話からは、診断にとどまらず、家庭・園・地域の中で行動への助言をどう届けるかという視点に大きな刺激を受けました。

杉山先生のご講演では、行動分析学の歴史と広がり学び直す貴重な機会をいただきました。特に、コンサルテーションを受けた方のコメントとして紹介されていた「所産から行動へ」という言葉が印象に残っています。薄く切れたキュウリという結果だけを見るのではなく、どのような行動がそれを可能にしているのかを見るという視点の転換は、行動分析学の魅力を象徴するエピソードのように感じました。

夕食後に改めて夜のセッションがあるという流れも新鮮で、おいしい食事で緊張がほどけたあと、またじっくり学べる時間がとても楽しかったです。その後、暖炉の前で率直な意見交換ができたことも印象に残っています。幹事の先生方の細やかなアテンドやサポート、アットホームな空気づくりのおかげで、初参加でも安心して楽しく過ごすことができました。心より感謝申し上げます。

嶋 大樹（追手門学院大学）

日本行動科学学会第 41 回ウィンターカンファレンスに参加しました。行動分析学の社会実装がテーマで、基本から多領域での応用まで幅広く学びました。どの発表も（さやか星小学校見学も）刺激的でしたが、専門の医療領域について少し書いてみます。

臨床行動分析コミュニティに所属していると、医療での行動分析学に基づく実践は一般的に思えます。ですがやはり、現実はそうではありません。シンポでは神経発達症支援の実情として、受診動機の多くが行動の問題であること、行動原理に基づく支援は認知されていても、あまり実践されていないことが紹介されました。自分の臨床を振り返っても、実践上の難しさが容易に思い浮かびます。

医療領域で行動分析学が役立つことは間違いありません。その実践や普及を妨げるのは何でしょうか。実践家の“やる気”や“熱意”でしょうか？ もちろんそんなことを言う人はこのNLの読者にはいないはずです。実践と普及につな

がる行動を分析し、構築すべき環境条件を考えることは社会的に重要なテーマに思えます。

そんなことを考えるヒントがもらえた貴重な時間でした。発表者の先生方、大会長の権藤先生、事務局長中村先生をはじめ運営委員の先生方、充実したカンファレンスをありがとうございました！

福田 実奈（京都外国語大学）

二泊三日、行動分析学漬け！

しなの鉄道中軽井沢駅より徒歩 10 分程、森の中に現れたのは軽井沢芸術倶楽部。ここで二泊三日の濃密な時間を過ごしました。シンポジウムは全て「～における行動分析学」と隅から隅まで行動分析学一色！もちろん毎夜開かれる懇親会も行動分析漬けで、芸術倶楽部のロビーで暖炉を囲みながら夜遅くまで議論を続ける豊かなひとときでした。

一点反省するならば、杉山尚子先生がレクリエーションの一つとして、一席だけ付箋で当たりを仕込んでおき、ご著書をプレゼントされるという企画で見事に私が当選してしまったことです。本当ならば、初学者の方や分野外の方に当たって欲しかったと思うのですが、当たってしまったものはいしょうがないということで、『看護学生ための心理学』を贈呈いただき、ちゃっかりサインまで頂戴してしまいました。その節はありがとうございました。

会期中にさやか星小学校を見学したのも貴重な経験でした。「さやかに星はきらめき」は中学生の頃からクリスマス時期に歌っていた思い出深い讃美歌で、その歌詞を体現するような素敵な学校だと感じました。行動分析学を駆使した教育、機会があればぜひ一度ご覧あれ！

最後になりましたが、このような素敵な会を運営して下さった関係者の皆様に御礼申し上げます。

引用文献

今田 寛 (2026). 心理学者・今田寛—90 年の歩

みと変化を語る．行動科学 (Behavioral Science Research) , 64 (2), 71-89.
柳井 修一・権藤 真織・今田 寛 (2026). 日本行

動科学学会 65 年の歩みとウィンターカンファレンス 40 年の歴史．行動科学 (Behavioral Science Research) , 64 (2), 91-98.

＜こんな本が出ます＞

『心理学は行動から何を語るか』

福田 実奈（京都外国語大学）

日本心理学会発行の『心理学ワールド』にて、以前「行動主義」にまつわる特集を組みました。

心理学ワールド 108 号（2025 年 1 月発行）

【特集】行動主義を見つめなおす——心なき心理学と呼ばれて

<https://psych.or.jp/publication/world108/>

これを端緒として、北大路書房の尾澤利隆さんからお声がけいただき、この度『心理学は行動から何を語るか』という書籍を出版する運びとなりました。

本書は、「観察可能な行動だけで『心』は理解できるか」という中心的な問いを掲げ、行動を通して人間を理解しようとする心理学の営みそのものを問い直すことを目的としています。スキナーによる徹底的行動主義や、その後のポスト・スキナーの行動主義の広がりを追うだけでなく、神経科学、認知心理学、社会心理学、そして科学哲学といった行動分析学の外側からの視座も交えて、多角的に行動を再考しているのが大きな特色です。

行動分析学に携わる私たちにとってなじみ深い「行動主義」を、内側だけでなく外側からも見つめ直すことで、その在り方がより立体的に浮かび上がる構成となっています。そのため、行動分析家や学習心理学を専門とする方々にとどまらず、広く心理学全般に関わる方、さらには

哲学や科学論に興味がある方々にもぜひ手にとっていただきたい一冊です。

ここで、本書に込めた思いとして、まえがきの一部を抜粋して紹介します。

「本書は、「心」や「行動」をめぐる考え方を、より深く広い視点から捉え直そうとするものであるが、その対象とする分野を学習心理学・行動分析学に限定する意図は全くない。むしろ、第二部で扱う神経科学、認知心理学、社会心理学、そして惜しみながらも本書では扱わない発達心理学、教育心理学などといった、「行動」に関わるあらゆる分野の人々にこそ、本書が提起する問いを共有したい。さらに、そうした問いの射程は心理学の枠を越えるものでもあるはずだ。哲学の領域、さらにはヒトやその他の動物の「心」や「行動」に関わる全ての人に本書が届くことを期待している。」

本書は、日本行動分析学会の年次大会に合わせて発売される予定です。臨床・実践の現場に立つ方々にとっても、日々の活動の指針を再考し、自らの拠るべき場所を見つめ直すための礎のような役割を果たせればと願っております。大会の熱気とともに、皆様の思索を深める一冊となれば編者としてこれに勝る喜びはありません。ぜひ、お手にとってご覧ください（次ページに書誌情報を記します）。

書誌情報

福田 実奈（編著）（2026）．心理学は行動から何を語るか 北大路書房

序 章 「行動」から心理学を問い直すということ 福田 実奈

第Ⅰ部 「行動」を紐解く

第1章 行動と行動主義の歴史 高砂 美樹

第2章 現代心理学の「心」の見方ともう一つの「心」の見方 丹野 貴行

第3章 行動のメカニズムと理論 澤 幸祐

第4章 生物諸科学に接続する行動主義 松井 大

第Ⅱ部 「行動」を縫り合わせる

第5章 神経科学における行動 鮫島 和行

第6章 認知過程と刺激・反応——認知心理学における行動 武藤 拓之

第7章 数理解釈主義と合理性の心理学 清水 裕士

第8章 行動主義はどうやって行動を説明するのか 森元 良太

第Ⅲ部 「行動」を編み直す

第9章 浅いは深い——「氷山」モデルの死角と文脈主義的支援の可能性 武藤 崇

第10章 文脈における行動の意味と支援——あらゆる支援を貫くパワフルで「優しい」枠組み
近藤 鮎子

第11章 組織における素朴な心理主義と行動 八重樫 勇介

終 章 心理学は行動から何を語るか 福田 実奈

編集後記

今号には、理事会からの報告として、総務委員会報告および編集委員会報告を掲載しています。事務委託先の変更や投稿・審査システムの導入、J-STAGE での即時公開など、学会運営や研究成果の発信に関わる重要な取り組みが紹介されていますので、ぜひご一読ください。

また、若手会報告および ABAA・SQAB 参加記では、行動分析学の次世代を担う研究者たちの学びや交流、そして国際的な挑戦の広がりが紹介されています。日本行動分析学会では、学生を対象とした ABAA・SQAB 参加助成や学会発表参加助成を実施しています。若手会員の皆様にはぜひ積極的に活用していただければと思います。詳細は下記の学会ウェブサイトをご参照ください。

<https://j-aba.jp/award/assist.html>

さらに本号では、眞邊一近先生の最終講義

や各種研究会・研修会の開催記を掲載しています。このうち、権藤先生・中村先生による日本行動科学学会ウィンターカンファレンスの記事は、他学会主催の催しではありますが、行動分析学との関連が深く、本学会会員にとっても有益な内容であることから、杉山尚子先生のご紹介もあり特別にご寄稿いただきました。この場をお借りして、関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

最後には、行動分析学に関する新刊書『心理学は行動から何を語るか』の紹介記事を掲載しています。本学会関係者も多数執筆に参加しており、行動分析学とその周辺領域との対話を考える上で興味深い一冊となっています。

今後ともニューズレターが、会員の皆様の活動を知り、研究や実践をつなぐ場となるとともに、本学会の歩みを記録し共有する媒体としての機能を果たしていければ幸いです。

(丹野貴行)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

- J-ABA ニューズでは、会員の皆様からの記事の投稿を募集しています。学会参加記、研究紹介、研究室紹介、施設・組織紹介、書評、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、その他行動分析学の発展に資する記事などが対象となります。投稿にあたっては、Word ファイル形式もしくはテキストファイル形式で、下記の編集部宛に電子メール添付でお送り下さい。
- 掲載の可否は、理事会での審議を経たうえで、編集部で決定します。記事の内容については、公開を前提に、個人情報等の取扱いも含め、各種法令の遵守に十分ご注意ください。また、学術的に明らかに誤った記事、学会活動や行動分析学に全く関係のない記事、営利目的と考えられる記事（著訳書等の紹介を除く）、差別的表現や誹謗中傷が含まれると判断された記事等については、編集部より修正を求める場合や、掲載をお断りする場合があります。J-ABA ニューズにおいて上記に関係する懸念がございましたら、編集部までご相談下さい。
- J-ABA ニューズは、日本行動分析学会のウェブサイトで公開されます。J-ABA ニューズに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属します。

〒191-8506 東京都日野市程久保 2-1-1

明星大学心理学研究室 (27-1201)

J-ABA ニューズ編集部 丹野 貴行

E-mail: tantantan01@gmail.com